

甲信越の天理教

山梨、長野、新潟の3県を総称して甲信越という。3県は南北に連なっているとはいえ、経済、文化などにおいて関係が深い訳ではない。なぜ甲信越という呼称があるのだろうか。

甲信越は関東地方の西に接する県であり、経済的には東京を中心とした関東甲信越地方の一部であり、その中部地方側を甲信越と見るのが一般的だ。したがって関東・東京があつての甲信越である。しかし、天理教伝道においては静岡から甲(州)、信(州)、越(後)へと伸展した伝道線があり、本教伝道に關する限り甲信越という言葉に意味が見いだせる。

山名系の信仰は明治20年代に静岡県内に広まった。その中、益津支教会(現大教会)は山梨県甲府へ興津源助という布教師を派遣した。これが甲府大教会の始まりであり、山梨県の北部へまた長野県、新潟県へと伝道線が伸びるきっかけともなった。明治24年暮れから26年頃のことである。

興津源助の甲府布教は山本政八、丸茂留吉・きぬ夫婦のおたすけをきっかけに親類、知人へ広まり、甲府のほか東山梨郡、北巨摩郡に信仰者ができ、明治26年に甲府大教会(当時支教会)、同27年に北巨摩分教会(当時出張所)が設立される。

明治26年、長野県上諏訪の岡本彦太郎は病を得、横浜の医者にかかろうと甲府に立ち寄った際、親類から匂いをかけられ入信した。岡本は理髪業を職としており諏訪の同業者に匂いをかけ、さらに松本や長野市の同業者へも道をつけた。こうした職業を介した布教は伝道の形として注目すべきである。

岡本の布教に甲府の三枝栄太郎や山本磯吉らの尽力があつて諏訪分教会(明治26、当時支教会)、松本分教会(明治27、当時支教会)、信州長野分教会(明治30、当時長野出張所)が設立される。

甲府でごく初期に信仰に入った中村通恵(男性)は最も熱心に布教した人で、県内北巨摩や県外布教に精を出した。「故郷ニテ布教スル位デハ悪因縁ハ果セヌト新道布教ヲ決心シ」(日記)、明治26年、数え19歳の時、新潟県十日町を布教地と定めた。その後、義兄である永関慶次郎らが北巨摩から布教応援に訪れ、明治28年北越分教会(当時布教所)の設立となった。

なお、福田国義も北巨摩分教会の県外布教の声に応じ明治35年に新潟市へ布教に出、明治44年に北新分教会(当時宣教師)を設立した。以上、静岡県山名から甲信越へ伝わった話である。

甲府系以外の甲信越伝道に移る。

山梨県には佐野原大教会系の教会が15カ所ある。佐野原大教会は富士山の南東、静岡県裾野市にある。そこから真北に進み箱根裏街道をさらに北進すると山中湖に出る。佐野原の道はここを歩いて山梨県に入ったのではないかと。

長野県では伊那大教会の教会が45カ所と最も多い。明治21年頃、静岡県山名系の信者松本弥平が長野県下伊那郡上郷村の萱間新六のもとで養蚕修行中に萱間の孫娘の腹痛を助けた。これが萱間家入信の動機である。

さて大雑把に言うと長野県への伝道は長野を取り囲む近県からなされた。南の静岡県、山梨県からは山名系が入り、現在伊那、甲府、名京など合わせて80カ所近くの教会になる。西の岐阜県および滋賀県からは河原町系の岐美、甲賀、湖東などが

入り、合わせて40カ所を越える教会がある。東は埼玉県の秩父系、栃木県の日光、東京都の深川、都などから布教線が入っている。ほとんどが隣県およびその周辺からで遠隔地からの伝道は見られない。これは長野県が隣接する県より教会設立が遅かったことが影響しているのではないかと。長野県では教勢倍加運動期の5年ほどの間に現教会の約半数ができています。つまりそれ以前の明治期から大正初期までは教会が少なかった。近くの県に早く教会ができ、それらの地域からまだ教会の少ない長野県へと伝道線が伸びたと考えて間違いではなからう。

なぜこうなったのだろうか。長野県では秘密訓令後、本教への迫害干渉が他県より厳しかったと言われる。伊那大教会などは明治26年に教会設立が許されているのに明治29年の訓令で許可を取り消されてしまった。長く訓令の影響が続き一派独立後もすぐには解消されなかった。長野の人は大変真面目で勤勉だと言われる。お上の指令(訓令)を生真面目に受けとめ、厳しい取締りをおこなった。同様にこの生真面目さが本教にあつては倍加運動という全教的運動に乗り遅れまいと倍加以上の結果を残したのかもしれない。

新潟県に話を移そう。甲府系の伝道はすでに述べたが、それよりずっと早く新潟市に本教は伝わっている。

明治15年、おやしきから遠くない川東村の鴻田忠三郎は派遣先の新潟県勸農場に勤務しながら熱心に布教した。鴻田のおたすけは霊験あらたかだ「生き神様」と呼ばれていた。噂が広まり新潟市ほか三条や長岡でも信仰する人ができた。明治16年1月に教祖のもとに帰ったが、再び新潟へ戻り布教に専心したいという希望は叶えられなかった。しかし残された信者たちは鴻田を忘れず熱心に信仰を続けた。

鴻田が新潟に滞在したのは1年に満たないほどだったが聞かされた教祖のご事跡や教えを求める気持ちは新潟の人々の間に時を経るごとに高まっていった。教祖現身お隠しの報にふれた人たちはおぢばへ帰る決心を固め、吉沢ミエなど4人の女性が1カ月かけて800キロ近くを歩いて帰った。新潟県初めてのおぢばがえりである。この信仰はやがて新潟大教会へと発展する。

新潟県には270カ所の教会がある。大教会別では湖東と新潟が各50カ所を越え、北洋、鹿島もともに40カ所以上ある。さらに甲府の26カ所を加えると5系統で200カ所を超え、新潟県の80パーセントに達する。新潟の伝道はこれで推定できる。

新潟県内湖東系教会の多くは北洋系の伝道によるものだった。湖東の伝道線上に名古屋大教会があり、名古屋の信仰が新潟県に伝わり北洋大教会となった。新発田、南越、栃尾など北洋の伝道線上の教会のいくらかが現在湖東大教会所属である。

石川県の鹿島系の信仰が新潟県長岡に伝わり県内40カ所の教会を有しているが、その全てが長岡分教会である。明治26年越乃國と鹿島(当時能登出張所)の布教師であった松永鶴吉は能登から船で柏崎に着き、さらに長岡に至り佐藤嘉吉の肺病を助けた。翌年松永は能登へ帰ったが、後を継いだ人たちにより明治28年、長岡分教会(当時出張所)が設立された。

新潟県の名古屋、北洋系はさらに山形県、秋田県へと伝道線を伸ばすが、別の機会に触れることにしたい。